



言葉—アイヒマンを捕らえた男

山崎正和 著

発行・中央公論新社 定価二、六二五円(税込)

たった一つの言葉

「われわれはそれを、君がどんな気持ちでやったのかを知りたいんだ」

ユダヤの人々の煩悶は続く。「彼」が処刑された今、「彼」の口から謝罪の「言葉」が引き出されることはない。

「彼」とはアドルフ・アイヒマン。数百万のユダヤ人を絶滅収容所へ送ったナチス親衛隊中佐である。

舞台は、他国へと逃亡したアイヒマンが、イスラエル秘密組織モサドの隊員に捕らえられ、法廷に引き渡されるまでの監禁生活を主軸に、二幕一五場の戯曲形式で語られていく。

評者・櫻井秀夫

法務省矯正局医療分類課

捕らえたアイヒマンによって揺さぶられていく隊員たちの感情のざわめきが、情景鮮やかに伝わってくる。それは、読者に投げ掛けられた問題の所在が、歴史的事実や正邪の評価とは全く異なる次元であることを想起させる。

「どんな極悪人にも自分の罪を認める能力がある」と信じ、謝罪という「たった一つの言葉」を待ち続ける隊員たち。それは任務だった。上官の命令に従っただけだ」と語るアイヒマン。

著者は、アイヒマンを監視するモサド隊員ピーターをしてこう言わしめる。

「君はなぜ人間の言葉を喋るんだ？ そのくせどうして、たった一つの『言葉』だけは口にしようとしらない？」と。

隊員たちにとって、吐き気がするほどの憎悪と隣り合わせに、アイヒマンの監禁生活は続く。その中で少しずつピーターは、アイヒマンの胸中に「人間」を見出していく。復讐心や敵対心を超えた「人間」という存在の前に、アイヒマンはピーターに「言葉」をつぶやき始める。

真にアイヒマンを捕らえたのは、モサドでも法廷でもなく、ピーターという一人の「人間」の言葉であった。

しかし、ピーターもまた愛する恋人へ「たった一つの言葉」：愛の言葉をその任務への忠実さゆえに言い出せない一人の「人間」であった。

「不幸を納得させる言葉ももらえないの？」恋人は自らの不遇を嘆く。その深い嘆きを与えた者は、「正義」としてアイヒマンに「言葉」を求め続けたピーターであった。開かれた戯曲は、その楽しみ方を読者に委ねている。筆者は、本稿でそのほんの一例を示したのみに過ぎない。